

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770045

研究課題名(和文) 浮世絵・挿絵系出身の日本画研究団体に関する総合的調査研究

研究課題名(英文) The comprehensive research investigation regarding groups researching Nihonga (Japanese-style paintings) descended from Ukiyo-e (Japanese woodblock prints) and illustrations.

研究代表者

篠原 聡 (Shinohara, Satoshi)

東海大学・課程資格教育センター・准教授

研究者番号：70439694

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：浮世絵系の日本画研究団体に関する研究は、伝統的な画流派の流れを汲むそれに比べて進んでいない。烏合会(明治期)と郷土会(大正期)に関する調査研究により、浮世絵系の日本画団体の活動や評価には、国内における浮世絵の評価の変遷や、官展における「美人画」の確立などの外的要因が影響していたこと、「美人画」の流行に対して、浮世絵派としてのアイデンティティの確立を志向する理念として「社会画」が郷土会において模索されていたことが確認された。

研究成果の概要(英文)：Studies of groups researching Nihonga (Japanese-style paintings) descended from Ukiyo-e (Japanese woodblock prints) have not made progress compared with those descended from traditional school of paintings. As a result of the research investigation regarding Ugokai (烏合会, the Meiji Era) and Kyodokai (郷土会, the Taisho Era), the following was confirmed:

1. Activity and evaluation of Nihonga groups descended from Ukiyo-e were deeply influenced by external factors, such as vicissitudes of evaluation of Ukiyo-e in Japan and the establishment of Bijinga (beautiful person pictures) at the Kanten exhibition.

2. In contrast to the popularity of Bijinga, Shakaiga (society pictures) as the ideology having in view for the establishment of their identity as Ukiyo-e was intended.

研究分野：美学・美術史

キーワード：烏合会/郷土会 浮世絵/社会画 簗木清方 美人画/日本画 明治時代/大正時代 展覧会/鑑賞者 浮世絵末流 日本近代美術史

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 明治以後に結成された日本画研究団体の中でも、浮世絵・挿絵系出身の画家が結成した団体に関する研究は、狩野派などの伝統的な画流派の流れを汲むそれに比べて進んでいない。本研究対象は、いずれも伝統的な画流派から外れる浮世絵や挿絵出身の画家が結成した日本画研究団体である。

(2) 烏合会は、明治34(1901)年に浮世絵系の画家が中心となって結成した日本画研究団体で、同45(1912)年まで東京で二三回の展覧会を開催している。鏑木清方の『こしかたの記』(中央公論美術出版、1961)の記述(同書所収の「烏合会」の項)をはじめ、関千代「烏合会について」(『美術研究』209号、1960)や『日本美術院百年史(三巻)上』(日本美術院、1992)所収の諸資料などの文献史的な先行研究はあるものの、その活動実態については不明な点が多く、同時代の他の団体に比べて研究が遅れているのが現状である。山口県立美術館が「明治日本画の新情景」展のなかで、同会を含む日本画研究団体を取り上げ、それらの活動や表現内容を、判明し得た限りの実作品に基づき検証したのも1996年のことであり、それ以後、烏合会については、近代日本アート・カタログ・コレクション『烏合会』(東京文化財研究所、ゆまに書房、2002)が刊行されてはいるものの、2006年に鎌倉市鏑木清方記念美術館が行なった文献調査『烏合会と「新小説」の時代』(鎌倉市鏑木清方記念美術館、2006年)にとどまる。以後、出品画家の基礎データや作品の所在調査を含む悉皆的な調査はされておらず、美術館での展覧会も開催されていない。

(3) 郷土会は、烏合会の中心人物の一人でもあった鏑木清方門下の門井掬水、西田青坡、伊東深水らが中心となって大正4(1915)年に

結成した日本画研究団体で、昭和6(1931)年まで東京で16回の展覧会を開催している。同会についての先行研究は、2009年に鎌倉市鏑木清方記念美術館が文献調査を通じて出品画家・作品に関する基礎データを整理した『鏑木清方の系譜(美術館叢書10)』(鏑木清方記念美術館、2009)がほぼ唯一の調査といてよい。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、浮世絵系の画家が中心となって結成した烏合会と、同会の中心人物の一人である鏑木清方(一八七八～一九七二)が大正期に入ってから、彼の弟子たちを中心に組織した郷土会を主な研究対象としており、①両団体の出品画家・作品に関する個別調査と、②両団体の活動実態および表現内容の連続性や非連続性についての検証を目的としている。

(2) 浮世絵・挿絵系出身の日本画研究団体に関する本研究は、①江戸時代の浮世絵研究と明治以降の日本近代美術史(日本画)研究の、二つの研究領域を横断する研究であり、研究の棲み分けによる領域間の断絶や、両分野の様式・表現にみる連続・非連続性を検証する重要な視点を提供する可能性を秘めている。②「日本画」の本流から外れた出自をもつ烏合会と郷土会の活動実態や表現のあり方を解明する作業は、日本画の表現の多様性を検証する作業でもあり、従来の「日本画」という概念の形成過程を再考することにも繋がる。③研究対象の画家や作品の主なジャンルが「美人画」であることから、グローバルな視点からみても一般的に人気の高い「美人画」を、学術的な観点から正当に評価する視座を獲得する成果も期待できる。④研究方法の観点からみれば、近年、統廃合や民営化の流れの中で軽視されがちな美術館・博物館の地道

な調査研究活動の重要性を再認識する機会にもなる。本研究は、東京をはじめとする地域博物館（美術館）との連携が必要となり、このことは、いわゆる地域博物館（美術館）の学芸員による地道な調査研究活動に光りを当てることにもつながる。さらに研究の進展のなかで構築される美術館・博物館との連携のあり方は、博物館学の領域においても大学とミュージアムとの連携をめぐるケーススタディ・実践的なプロジェクトモデルとして、大学における学芸員養成課程の教育活動にも還元されるであろう。

### 3. 研究の方法

(1) 烏合会については、2006年に鎌倉市鐮木清方記念美術館が行なった文献調査『烏合会と「新小説」の時代』（鎌倉市鐮木清方記念美術館、2006年）を基礎資料としながら、出品画家・作品の個別調査と資料収集を行う。また、研究協力者として角田拓朗（神奈川県立歴史博物館・主任学芸員）に当該調査の補助をお願いした。

(2) 郷土会については、2009年に鎌倉市鐮木清方記念美術館が行った文献調査『鐮木清方の系譜（美術館叢書10）』（鐮木清方記念美術館、2009年）を基礎資料としながら、烏合会同様に出品画家・作品の個別調査と資料収集を行う。

(3) 「美人画」の調査については、研究協力者として佐藤美子（川崎市市民ミュージアム・学芸員）、山本由梨（佐倉市立美術館・学芸員）、吉井大門（日本郵船歴史博物館・学芸員）、今西彩子（鎌倉市鐮木清方記念美術館・学芸員）、中千尋（日本画家）に調査の補助をお願いした。いずれも、浮世絵から日本画への連続・非連続性、浮世絵の近代化のプロセス、浮世絵・挿絵系出身の画塾のあり方、その展覧会システムの形成などにも光

りを当てることになる。

### 4. 研究成果

(1) 明治中期から大正中期頃にかけては、浮世絵系の日本画団体の活動や評価は、①明治末期から大正期における国内の浮世絵の評価の変遷と相関関係にあり、②大正期の官展における「美人画」の確立などの外的要因も大きく影響を及ぼしていた。

(2) 大正期から昭和戦前期にかけて、鐮木清方が用いていた「社会画」という造語は、彼の出自である「浮世絵」をいわば脱構築しようとする際に繰り返し意識されていた。

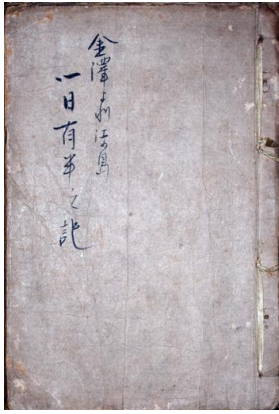
①1回目は官展において「美人画室」が出現して以降、官展画家として進むべき道を模索する大正中期頃をピークとして、2回目は、弟子たちが組織する郷土会とともに木賃宿で小展覧会を開催した昭和3年から7年頃にかけて、である。図式化するならば②1回目は鐮木清方個人の画家としてのアイデンティティの確立を志向する概念として、2回目は郷土会（浮世絵派）という流派としてのアイデンティティの確立を志向する理念としての「社会画」である。「美人画」に対して「社会画」という理念に基づく絵画が、郷土会において模索されていた。

(3) 烏合会に関する下記の新出資料を発見・収集した。いずれも実作品や史料の少ない烏合会の活動を知る手がかりとなる貴重な資料である。

#### ①『金澤から江の島へ 一日有半之記』

烏合会第1回展開催に前後して、烏合会の創立会員らにより企図された金澤旅行の紀行文（明治34年8月）である。

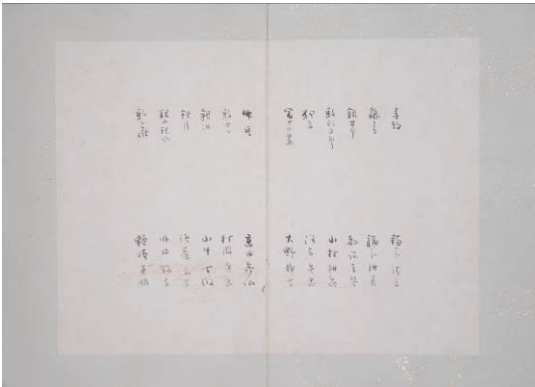
メンバーは高田鶴仙、福永耕美、都築真琴、大石雅方の4名で、挿絵が全12図収録されている。当該資料は烏合会創立会員の一人である山中古洞が保管していたようで、同資料



の末尾には種類の異なる 400 字詰め原稿用紙 3 枚が挿入されている。山中が大正 12 年に執筆した原稿で、たまたまこの資料を見つけて再読した彼が 23 年前の昔を

懐かしみ、再び「他の同行の士に廻読」を企図したことを同原稿は伝えている。烏合会の結成当時の雰囲気や今に伝えるとともに、同会解散後も会員同士の交流が続いていたことをも示唆する重要な資料である。

## ②『烏合会画帖』



画帖は全 12 図で、開くと左右に絹が貼られ、その上に淡彩で各図が描かれている。12 ヶ月図の体裁である。各画題と執筆者は以下の通りである。春駒（鏑木清方）、飾り馬（福永耕美）、銀世界（都築真琴）、駒形あたり（山村耕花）、狂言（河合英忠）、富士の麓（大野静方）、竹馬（高田鶴仙）、駒迎へ（村岡應東）、銀河（山中古洞）、銀月（須藤宗方）、銀山銀水（竹田敬方）、駒ヶ嶽（齋藤英朋）。鏑木清方の落款印象から、明治 42, 3 年頃に制作された可能性が高い。美人画や文学性、西洋絵画という側面だけでは語りきれない烏合会の一側面を読み取ることができる貴重な資料である。

（4）当該研究の成果の一端として、下記の報告書を刊行した。

『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』（東海大学課程資格教育センター、2016）。同書所収の論考・資料は以下の通りである。

- ①篠原聰「調査研究概要」
- ②篠原聰「鏑木清方と郷土会の画家たち」
- ③角田拓朗「明治後半の画壇状況における烏合会の位置づけ—美人画、文学、洋画—」
- ④佐藤美子「浮世絵研究雑誌における鏑木清方」
- ⑤山本由梨「婦人雑誌にみる文展美人」
- ⑥吉井大門「美人画ポスターの諸相—日本郵船を中心に（明治末～大正前期）」
- ⑦今西彩子「清方、奈良・京都における制作—新境地の風景画と美人画」
- ⑧中千尋氏「日本画制作者の視座による美人画解説」
- ⑨篠原聰『『金澤から江の島へ 一日有半之記』 解題』
- ⑩角田拓朗『《烏合会画帖》 解題』

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文等〕（計 12 件）

- ①篠原聰「鏑木清方と郷土会の画家たち」、『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、東海大学課程資格教育センター、2016年4月、pp9-30. 査読無し
- ②篠原聰「鏑木清方と珊瑚会をめぐる人々」、『鏑木清方と珊瑚会（鏑木清方記念美術館叢書18）』、鎌倉市鏑木清方記念美術館、2016年2月、pp201-203. 査読無し
- ③篠原聰「鏑木清方と幕末明治の彫師・摺師」、『鏑木清方の随筆「こしかたの記」を読むその2（鏑木清方記念美術館叢書17）』、鎌倉市鏑木清方記念美術館、2015年1月、pp205-206. 査読無し
- ④篠原聰「硯友社とその挿絵を描いた人々」、『鏑木清方と硯友社（鏑木清方記念美術館叢書15）』、鎌倉市鏑木清方記念美術館、2014年3月、pp202-207. 査読無し

⑤角田拓朗「明治後半の画壇状況における烏合会の位置付け—美人画、文学、洋画」『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、東海大学課程資格教育センター、2016年4月、pp31-40. 査読無し

⑥佐藤美子「浮世絵研究雑誌における鏗木清方」『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、東海大学課程資格教育センター、2016年4月、pp43-50. 査読無し

⑦山本由梨「婦人雑誌にみる文展美人画の女性受容者—鑑賞・美容・制作」『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、東海大学課程資格教育センター、2016年4月、pp51-60. 査読無し

⑧吉井大門「美人画ポスターの諸相—日本郵船を中心に（明治末～大正前期）」『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、東海大学課程資格教育センター、2016年4月、pp61-72. 査読無し

⑨今西彩子「清方、奈良・京都における制作—新境地の風景画と美人画」『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、東海大学課程資格教育センター、2016年4月、pp73-84. 査読無し

⑩中千尋「日本画制作者の視座による美人画解説」『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、東海大学課程資格教育センター、2016年4月、pp85-100. 査読無し

⑪篠原聰「[解題]『金澤より江の島 一日有半之記』」『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、東海大学課程資格教育センター、2016年4月、pp103-108. 査読無し

⑫角田拓朗「[解題]『烏合会画帖』」『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、東海大学課程資格教育センター、2016年4月、pp109-113. 査読無し

[学会発表] (計1件)

①篠原聰「鏗木清方と郷土会の画家たち」、成城美学美術史学会、成城大学、2015年7月15日)

[図書] (計1件)

①篠原聰 他 6名、東海大学課程資格教育センター、『美人画の諸相—浮世絵・団体・メディア』、2016年4月、p114.

[その他]

(1) ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へKAKEN (研究成果の社会還元・普及事業)

①平成26年度「展覧会をつくろう!! 日本画の魅力と学芸員のしごと」(代表者:篠原聰、東海大学ネクサスホール、2014年8月22日)

②平成27年度「キュレーター(学芸員)の仕事を経験的に学ぼう～日本画の魅力と作品保存の科学～」(代表者:篠原聰、東海大学松前記念館講堂、2015年8月19日)

(2) 講座等

①市民講座「郷土会とその時代」(篠原聰、鎌倉市鏗木清方記念美術館、2015年4月24日)

(3) ホームページ・活動報告等:

①「ひらめき☆ときめきサイエンス」を実施しました

<http://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/honan/news/detail/20140901.html>

②中高生を対象に「キュレーター(学芸員)の仕事を経験的に学ぼう!!+日本画の魅力と作品保存の科学」を開催しました

[http://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/honan/news/detail/post\\_150.html](http://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/honan/news/detail/post_150.html)

③学振トピックス平成26年度「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」

[https://www.jsps.go.jp/information/topics/hirameki26\\_2.html#20140822](https://www.jsps.go.jp/information/topics/hirameki26_2.html#20140822)

④「庶民の芸術 浮世絵への熱い視線」

<http://www.tokainewspress.com/view.php?d=1166>

⑤美人画研究会@tokai

<https://www.facebook.com/Bijin-ga-tokai-494849604054783/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

篠原聡 (Shinohara, Satoshi)

東海大学・課程資格教育センター・准教授

研究者番号：70439694

### (2) 研究協力者

①角田拓朗 (Tsunoda, Takurou)

神奈川県立歴史博物館・主任学芸員

②佐藤美子 (Satou, Yoshiko)

川崎市市民ミュージアム・学芸員

③山本由梨 (Yamamoto, Yuri)

佐倉市立美術館・学芸員

④吉井大門 (Yoshii, Daimon)

日本郵船歴史博物館・学芸員

⑤今西彩子 (Imanishi, Ayako)

鎌倉市鐙木清方記念美術館・学芸員

⑥中千尋 (Naka, Chihiro)

日本画家・日本舞踊師範名取